

「僧伽羅國縁起」と「羅刹女国」

——井上靖の説話風作品——

On INOUE Yasushi's Legendary Works

佐々木 充

SASAKI Mitsuru

一

福田宏年氏は、昭和四十五年一月に出た『自選井上靖短篇全集』（人文書院）の「作品解題」で、この「僧伽羅國縁起」「羅刹女国」を含む、「洪水」から「褒姒の笑い」に至る短篇群を、「伝説的な物語」とか「説話ないし伝説的」と呼んでその特質としておられる。

井上靖自身もまた、昭和五十年三月の三好行雄との対談で、「洪水」を持ち出して、「説話の持っている心を書くこうとしている」と自解し、「ああいうものはいくつかありますけれども、歴史小説か歴史小説でないかという分け方は非常に難しい。」と述べている。「いくつかある」というそれらが、具体的にはどの作品なのか、話は他の話題にずれていつて明示されことなく終わってしまうが、福田氏が井上文学の周到な解読者であることを考えるとき、井上が想定している範囲と福田氏のそれとは、たぶん、重なるであろうと思われる。

私はここで、両氏の言う伝説・説話風の作品の中から、『大唐西域記』に素材を得ている作品に注目する。西域に関心を深くした井上だからである。素材をどのようにモデファイしているかを確かめながら作品世界の構造を分析して、「説話ないし伝説的」なる内実を明らかにしてみたい。

二

「僧伽羅國縁起」は、昭和三十八年四月に雑誌『心』に、「羅刹女国」は同年八月に雑誌『新潮』に掲載された。

説話ないし説話的作品では、よく、話者・作者が作品の中に素顔（または素顔に見せかけた顔）を覗かせるが、「僧伽羅國縁起」でも、末段に「以上の話は玄奘三蔵の大唐西域記に紹介されている」云々と、井上は生の声でこの作の素材・原拠を明かしている。

井上は岩村忍との共著『西域』（昭38筑摩書房）の「あとがき」に、「高等学校の学生の頃から西域関係の旅行記を読み出し」と記している（上引の三好との対談でも同趣のことを語っている）。『大唐西域記』は「西域関係の旅行記」の代表的な著作だから、この書に対する井上の親しみはかなり早くに始まり、深くに及んでいたと見るべきであろう。ちなみに、「楼蘭」（昭和33・7『文藝春秋』）も『大唐西域記』によってその国のことを知り、『史記』から楼蘭についての記述を拾い、ヘディンの日記に結びつけて出来あがったと、井上は語っている（『わが文学の軌跡』「海」昭51・6）。

いま、『大正新修大蔵経』『史伝部』に収められている『大唐西域記』を検すると、その巻第十一の冒頭に「雖非印度之國路次附出」との注記つきで、た

しかに、僧伽羅国はでてくる。この『大唐西域記』は諸国歴訪の書でもあり、その叙述のスタイルはおおよそ決まっている。まずその国の国勢を記し、ついでその宗教事情―ことにも仏教の過去と現在が詳細に語られ（つまりは歴史が辿られ）、政治経済的な状況が地勢とからめて叙される、という形である。が、僧伽羅国は右に記した注記が示すように、玄奘三蔵が直接その地を踏んではないため、最初の国勢こそ定型的に記されるが、肝腎の中心部分は現実の国情の実見記ではなく、この国がいかにして成立したかということを書き方法をとってそれに代えている。つまり中心は建国説話で成り立っているのである。

ところで、この建国説話が一つではなく二つ記されている。むろん、それは初めから分かることではない。「僧伽羅国。周七千余里。国大都城周四十余里。」と始まる本文を読んでゆくと、すぐに「僧伽羅国縁起」のストーリーに重なるところのある話が記されていて、これがこの作品の原拠であろうことが判るのだが、その原拠とおぼしい話が終わると、「斯一説也。」とあって、すぐ続いて「仏法所記則曰。」と断り書きが記され、それまでとはまったく内容の異なる所伝が記されるのである。前の話―「一説」は非仏法所記つまり俗説・俗伝であり、後の話―「仏法所記」は仏説・仏伝なのであろう。このように、最初に俗説を掲げ、ついで仏説を記すことで、この国が仏教に強く深く浸透されている幸いなる国であるということを、玄奘は、穏やかに示していると読むことができるのだが、右に記したように、この二つの建国説話の内容は、まったく別であって、重なるところは一点もない。そして、この後の話―仏説の方を読んでもみると、どうもこれが井上の別の作品「羅刹女国」の原拠であるらしく、読めてくるのである。

前の話―俗説と「僧伽羅国縁起」とはそのストーリーの骨組みがきっちり重なって、その関係の深さは疑いようがないが、後の話―仏説と「羅刹女国」の関係はそれほど密着していず、その途中までを利用する形で「羅刹女国」は終わっているのである。つまり、原拠の二つの話は、僧伽羅国の建国説話の二伝として並記されているのだが、「僧伽羅国縁起」の素材利用の仕方と、「羅刹女国」のそれとは、大変に違うのである。

三

以上を纏めると、「僧伽羅国縁起」の素材としての『大唐西域記』を点検してみたところ、それに隣接して「羅刹女国」の素材にあたるものも発見できたということである。「羅刹女国」では、そのどこにも（「僧伽羅国縁起」のようには）、その原拠を示唆する文言は記されていない。ただ、冒頭の段落の最後に「この物語の舞台となっている羅刹島は当時の獅子国、現在のセイロン島附近に散在している小島の一つと考えていいであろう。」とあって、「僧伽羅国縁起」を記憶する読者には、その獅子国という名を通して、この二作の近い関係が想定できる形になってはいるが。「羅刹女国」は「僧伽羅国縁起」の四ヶ月後に発表された。執筆の順は、多分、発表の順であろう。（間に「宦者中行説」が入っている。）

また、この僧伽羅国の建国説話は、わが『今昔物語集』に収められている。「巻第五 天竺 付 仏前」の冒頭である。「僧伽羅五百人商人共至羅刹国語第一」が仏説のほうであり、次の「国王狩鹿入山娘被取師子語第二」が俗説のほうである（順序が入れ代わっている）。岩波・日本古典文学大系22『今昔物語集』の「僧伽羅五百人商人共至羅刹国語第一」頭注では、出典は『大唐西域記』とし、同一説話が『法苑珠林』等にあること、また我が国では『今昔物語集』のほかにも、『宇治拾遺物語』の巻六に「僧伽多行羅刹国」としてあることを、記している。同じく「国王狩鹿入山娘被取師子語第二」の頭注では、『太平記』の巻三十二に「換骨奪胎したもの」があると記す。

井上が何によってこの「僧伽羅国縁起」と「羅刹女国」を書いたかは、結局、井上自身が言うように、『大唐西域記』によるとよいであろう。かりに、もし先に『今昔』を読んでいたとしても、西域に関心が深かった井上が、『大唐西域記』へ遡ることをしなかったとは到底考えられないし、また『大唐西域記』は参看がそれほど困難な書でもないのである。

四

昭和四十年一月、これら二作は作品集『羅刹女國』（文芸春秋新社）に収められるが、その際、「羅刹女國」が冒頭に据えられ、「僧伽羅國縁起」は次位に配された。が、既に記したように「僧伽羅國縁起」の方が「羅刹女國」よりも発表が早く、また、原典たる『大唐西域記』でも、その記述が先にある。「僧伽羅國縁起」からみてゆくの、順であろう。

「僧伽羅國縁起」

作の冒頭の六段落は、隣国へ興入れの途中、虎の出現に脅えた一行が花嫁を置き去りにして逃げ出してしまい、花嫁も失神してしまう——という内容である。いかな猛虎でも、「屈強な若者たち」「三十名程の侍衛」がいたのだから、なにも抵抗せずにみな逃げ去るというのは少し極端にすぎる。作者は「この地方にめったに虎は出没しなかったので、たれも虎に対していかなる措置をとっていいか知らなかった。」「若者たちはいちように足の疎むのを感じた。」と設定して、この異常な状況の現出を一応合理化してみせるが、しかし、この筋立ては、やはり、出だしの「往古南印度に小さい王国があった。」にふさわしく、一種の奇譚・奇話として展開するらしいことを、われわれ読者に示す。

このところ、原拠ではどうなっているか。非常に簡単な記述しかない。

此国本宝渚也。多有珍宝棲止鬼神。其後南印度有一国王。女娉隣国。吉日送歸路逢師子。侍衛之徒棄女逃難。女居輿中心甘喪命。

師子は獅子、ライオンのことであろう。井上は虎に改変している。隣国へは五日の旅である、あたかも花嫁一行をねらったような、夜の「不気味な吼え声」その徐々の接近、たまりかねた若者達が月光を避け物陰にかくれて逃亡する、みな、作者の創作にかかる。

侍衛の者たちが逃げ去ってしまったから、一段と大きくなった咆哮は更に何回も聞えたが、何回目かにその咆哮と共に、咆哮の主は花嫁の輿だけが置かれてある平坦地の一角に姿を現した。巨大な体躯を持った一匹の虎であった。

虎は月光を全身に浴びながら天幕の周囲をゆっくりと廻った。すると天幕の垂幕の一箇所が揚がって、ふいに女が姿を現した。丁度虎はその女の出て来る前を歩いていたところだったので本能的に何間が跳躍して飛び退ると、地面に体を低くして身構えた。女は青白い月光の中を数歩蹣跚めき歩き、吸い寄せられでもするように虎の方に近寄って行くかに見えたが、間もなく枯木でも倒れるような唐突な倒れ方で倒れた。花嫁は失神したのであった。

これが五・六段目である。大変に視覚的な、場面再現的な記述である。夜の間の中から、月の光りに照らされた平地に虎がその軀を現す——というのは、中島敦の「山月記」を想起させて損をしているといえようが、それは多分、井上充分承知のことで、決して同じ道を行くものではない自信があつてのことであらう。

さきに記したように、三十人もの従者が何の抵抗もせず逃げ散ってしまい、主たる花嫁に一人として忠誠の念を示さないのもどうかと思われ、一人とり残された花嫁が、虎の目の前に出て来るというのも偶然としてもあまりに上手く出来すぎている。というように、この描写は大変に視覚的でリアルではあるけれども、しかし、いわゆるリアリズムの作品ではないことを明示する。御都合主義的といつてよいほどに、ある方向に向かって読者を誘う。虎が「巨大な体軀を持つ」ているとか、花嫁が「枯木でも倒れるような唐突な倒れ方で倒れ」るとか、ありきたりの、半歩ずれると稚拙に堕しかねない描写も、この作品が典型をめざすものではない、つまり、類型的なものの時空を作り出そうとしていることの現れと見るべきであろう。

次は、「それから十数年経過した。」と始まる第七段階から、母子が母国に戻る十一段落まで。この部分、大きくは原拠から離れてはいない。むしろ原拠の文章は漢文一流の簡潔性の高い叙事文ゆえ、字数は二千字ほどであるが、粗筋を語るとすれば、どちらに依拠しても大きくは変わらないのである。つまり、女と虎の間には男児と女兒が一人ずつできた。姿形は人間だが、力や心は獣であった。ところが成人におよんで人知を発し、母になぜここを逃げ出して人間界に戻らぬかと問う。躊躇する母をうながして子二人は父の留守をねらって

脱出、幸いに母の国へ着いたがすでに知る人はなく、人々の同情を得てなんとか暮らすことができるようになる――。

がその中で、井上は原拠をふくらませてアクセントをつける。たとえば虎の妻となったかつての花嫁にこんなふうな心を与える。「女は自分を見舞った奇しき運命を歎き悲しみはしたが、何事も宿世の因縁と諦めて、自分は畜生の妻として一生を送ろうと思いつめていた。」これは、われわれに馴染みの、わが平安朝の女性でもあるかのような（つまりはまた、堀辰雄の王朝物のヒロインを思わせるような）、類型化にはかならない。また、子供たちが、自分の運命について執拗に母に尋ね、母は告げたくはなかったのだがその執拗さに負けて語り出すという設定も井上のもので、ここには、知るべきではない過去の秘密を知ってしまうというモチーフが、原拠よりも強調されて使われている。しかし、そうした中で、たとえば、二人の子供が人知を発し人語を解するようになるのを「ある年の月蝕の夜」として、虎がその女を見たのが「青白い月光の中」であったことを踏まえ、それを覆し否定する瞬間を設定するというような、細部の作りへの配慮をみせていることも言っておかねばならない。そして、これもまた一種の因縁の姿――説話的モチーフだということもできるのである。

次は十二段落から十六段落まで。孤独になった虎が妻子恋しさで裏切られた怒りとで、人里に出て人畜を襲うようになる。国王は国民のために虎を討つことに懸命になる。しかし虎は神出鬼没、被害は増すばかり。王は重賞をもって退治にあたる者を募る。貧しい暮らしから抜け出すために、息子はそれに応じようとする。母は虎といっても父なのだと、思いとどめようとするが、すでに一度捨てた以上、父ではなく虎だと息子は言う――。この部分の粗筋も、両者大きく齟齬しない。目につくのは、「母はそれを聞くと、顔を悲しみで歪めて」子を諫めるとか、とうとう説得できないと知って「その場に伏して、たださめざめと泣くばかりであった。」というリアライゼーション――描写である。

続いて、十七段落から二十五段落。小刀を懷中に出発した息子は、王に謁して虎を討つ許可を得る。虎は討つ手を見て一瞬立ち上がり、咆哮するが、その姿を息子と認めると、穏やかに身を伏せる。息子は小刀を虎の腹に突き立て、大きく切り裂く。虎は苦しみながら息絶える。前の部分同様、粗筋に大きな変

化はない。だが原文は六十五文字、井上は約千八百字、漢文と現代日本語の相違を考慮しても、井上が、細部の構築に、かなりのエネルギーを注いでいることを指摘しなくてはならない。

息子の出発から虎に出会うまで（十七段落――二十二段落）を、原典では「乃袖小刀出応招募。是時千衆万騎雲屯霧合。師子踞在林中。人莫敢近。」と四つのフレーズで簡潔に記述しているが、井上は息子が見張りの屯所を幾つも經由し、時には兵士に戻ることを勧められたりしたがやっと王に拝謁して応募を認められることを記し、虎の出現を待つがなかなか現れず、やっとある夜その出現を告げられる。虎の潜む原始林を大勢の兵士が、半ば逃げ腰で囲んでいる。虎は大きな偏平な岩の上にうずくまっている――、というように、原典にはない細部を書き込んでゆく。その中で「若者は山麓の屯所で何日かを無為に過ごした。千衆万騎山を囲み谷を埋めていたが」と、原典の表現をそのまま採用したりなどもしている。

二十三段落――二十五段落は虎との対決場面である。このところの原文はこうである。「子即其前父逐馴伏。於是乎親愛忘怒。乃剗刃於腹中。尚懷慈愛猶無忿毒。乃至剗腹含苦而死。」井上の筆は前段同様、細部を現実的な描写で埋めたり息子の心理を記したりしている。たとえば、虎が人間の接近を覚ったときの反応を井上はこう記す――「虎は徐ろに体を上げると、前足で突張るようにして背を大きく反らせ、ひと声高く咆哮した。風が木々を揺すぶっている。虎は石の上を小さく半円を描いて廻ると、尾を垂れ、自分に近寄って来た不敵な若者を襲うべく、身を屈め、頭部を低くして身構えた。／若者もまた虎に眼を当てたまま身構えていた。と、次の瞬間、虎はふいに体の緊張を解くと、襲うことを忘れたように再び前脚を折り、ひどく他愛ない感じで、その場に身を伏せた。若者は相手がはつきりと自分は何ものであるかを認めたことを知った。」

そしてその後、息子が虎に小刀を突き立てるまでの様子――「若者は近付いて行つた。虎は動かないでじっとしていた。若者は猛獣の眼の中に懐しさと優しさ以外のいかなるものもないのを見てとった。若者が石の上に登って行くと、虎はゆっくりと若者の方へ頭部を廻した。若者は虎の前へ行つて、そこに身を

屈めた。すると、虎は体を横倒しにし、眼を細め、何とも言えない慈愛に満ちた眼眸で若者を見守った。若者はさすがに父である虎のこのような態度に胸を衝かれたが、そうした思いを突き離すようにして、懐中の小刀を索ると、いきなりそれを虎の腹部深く突き刺した。」

残るは二十六段落から最後の三十三段落までである。ここでは、最初の二十六段落に書き替えがあるのは、原典の記述のままと言つてよい。

その二十六段落の書き替えとは、原文のちよつと分かりにくい表現をバラフリーズしつつ、筋の通った記述に整えたものである。原文にこうある。「王曰。斯何人哉。若此之異也。誘之以福利。震之以威禍。然後具陳始末。備述情事。」要するに息子は完全黙秘して、王の質問に答えなかつたということが、この記述の陰に隠れているのである。――なにしろ、自分はこの国の前の王家の血を引く者で、かつ人間と虎との間に生をうけた者なのだから、無警戒に身元を明かすことは出来なかつたのだ、というのが、この話の原著者の判定するところであつたのであろう――それで王は、つぶさに話せば恩賞のほかに重用しようとか、話さなければ国外に追放するとか、あの手この手を使って真実を述べさせた、ということ、井上は補筆しているのである。

それ以下は原典のままであつて、翻訳ではないけれどもそれに近い感じの記述である。事実、井上は、息子の陳述に対する王の言葉を、いわゆる漢文訓読体で直訳して示す。事の決着をつけるべき王の言の重々しさを効果的に表現し、併せて、このストーリーの時間・空間が古代の異国であることを、あらためて読者の感覚に蘇らせるためであらう。

逆なるかな、父にしてしかも尚害す。況んや親に非るものをや。畜種は馴れ難く凶情は動き易し。民の害を除くはその功大なれども、父の命を断つはその心逆なり、重賞を以てその功を酬い、遠放を以てその逆を誅せん。

則ち国典は虧かずして王言は式ならず

この王の言はただちに実行される。二隻の大船が建造され、ともに山のような食糧や衣服が積み込まれ、兄と妹はそれぞれの船に乗せられ、放ちやられる。母は国に止められる。息子の船は豊かな島に漂着し、そこで暮らすうちにある日商人の船が島に到り着く。息子はその商人を殺し、その子女との間に子を生な

し、やがて島は一つの国となった。それが獅子国である。娘の船は波刺斯の西に流れ着き、女は神鬼の魅せられるところとなって多くの子をなし、西大女国となったのがこれである。――という具合に、建国説話の収束となるのであるが、井上は、最後に三十三段落目を構想し、次のように記す。

以上の話は玄奘三蔵の大唐西域記に紹介されている。玄奘は獅子国へは渡らなかつたので土地の人から聞いた話を書き記したものとされる。

「獅子国の人は形貌卑黒にして、方頤、大頰、情性は獷烈にして、安んじて鳩毒を忍ぶ。これまた猛獸の遺種なる故に、その人は多く勇健なり」――大唐西域記はこの説話の紹介を、このような文章で結んでいる。因みに玄奘三蔵が印度へ行った七世紀前半には、獅子国の名は廃され、僧伽羅国という名で称ばれていた。現在の錫蘭島がこれである。妹がその祖となつた西大女国の方は、それが現在のどの島にあたるか判っていない。

「獅子国の人は……」という引用は、これも原典のままであるが、この附記なしには、作品「僧伽羅國縁起」が完結しないことも、確かである。なぜならば、原話には獅子国とのみあつて、僧伽羅国とは記されていないからである。「土地の人から聞いた話を書き記したものと思われる。」という推定は、最初に触れたように、「大唐西域記」巻第十一の冒頭に、二十三か国の国名が列記された時、「僧伽羅国」の下に、割注で、「雖非印度之國路次附出」とあることを元に、なされたものであろう。

いずれにしても、この最後の一段は、まさにこの作品が、原典そのままに建国説話であることを明示している。

そればかりでなくこの一段は、作者が手の中を曝すにほかならない部分でもある。だがそれについて井上は、まったく躊躇していない。当然のことのように記している。あらためて言うまでもなく、題にすでに、この作が縁起物であることは、はっきりと示されていた。

以上に見るように、井上靖は、この「僧伽羅國縁起」を、その骨組みもまたその陳述の順序も、忠実に原典「大唐西域記」に依拠し、ストーリーの基本に関わるような変更は加えていない、ということが出来る。彼が加えたのは、細

部の状況であり、登場人物の心から発する言葉や行為の最小限の付加、であった。そうすることで、原典の特性である「記録性」に変化が生じ、読者がその過去の時点に立ち会っている気配が濃厚になってくる。つまり、縁起——事の成り立ちの一部始終——起源の説話に、われわれを連れてゆくのである。

五

「羅刹女国」は、では、どのように作られているか。

「羅刹女国」だけを読むかぎり、これが、「僧伽羅国縁起」と直接の関係がある作品だと判ぜられないと言つてよいだろう。そのどこにも、「僧伽羅国縁起」との係わりは記されていないし、これが『大唐西域記』によるものだというようなことも、記されていないからである。すでに記したように、「僧伽羅国縁起」の末尾の記述を見、それに興味を覚えて『大唐西域記』を繙いてはじめて、この二つの作品が、その原拠を一つにするものであるということを知るのである。また、作品集『羅刹女国』でこの作品を読むと、これは集の冒頭にあり、「僧伽羅国縁起」は二番目に配置されているから、「羅刹女国」もまた、その原拠を『大唐西域記』に持つということは、やはり、なかなか分からない。

原話の大筋は以下のようである。

昔、この宝州に大鉄城があつて、五百人の羅刹女が住んでいた。女たちは、この地にたどりつく商人などがあると、大いに歓待し、あげくに牢に閉じ込めては喰うのを習わしにしていた。ある日、僧伽羅という商人が、五百人の商人をつれて漂着した。羅刹女は男を一人ずつ得て欲をつくし、揃つて子供を生んだ。が、みな男に飽き、隙を捉えて男たちを牢に閉じ込めようと考えだした。……①

悪夢をみた僧伽羅が、こっそり逃げ道を捜していると、牢のそばに出、中から泣き声が聞こえるので問いかけると、「女たちは羅刹女で、私の仲間も大半は喰われてしまった。海岸に出て懸命に祈ると、天馬が来て助け

てくれる。」と教えてくれた。僧伽羅たちが祈ると天馬が現れたので、たてがみに掴まって逃げ出した。ところがそれを察知した羅刹女たちが追ってきて、男たちを情にからめて口説くと、僧伽羅以外の男たちは、みな女たちと戻ってしまった。……②

僧伽羅を夫にしていた女王はくやしがり、僧伽羅の家へ飛んで行き、僧伽羅の父を騙して僧伽羅の帰りを待った。戻ってきた僧伽羅が女王を容れなかったので女王は国の王に訴え出た。王はその美貌に目がくらみ、後宮に止めた。女王は国から羅刹女をひきつれて戻り、一夜で宮中の人間を喰いつくした。人々は恐れ、僧伽羅を新たに王とした。僧伽羅は憂患を救うために兵を整えて羅刹女国へ向かい、女たちを始末してそこに国を建てた。王の名をとって僧伽羅国という。……③

「羅刹女国」は、このストーリーの前半、①と②とを素材としている。③の部分にはまったく触れない。

①と②を素材としているといっても、その素材離れは著しい。「僧伽羅国縁起」の創作部分が、それぞれの場面の現実化のレベルにとどまっていたのに対して、上記、原話の③を完全に無視したことに顕著なように、「羅刹女国」ではストーリーの改変にまで及ぶ。具体的に見てみよう。（「羅刹女国」は全四十段落からなる。以下その段落による。）

第一段落は、いわば、序であるが、「昔宝州に属する小島に一大鉄城があり、そこに五百の羅刹女が棲んでいたという記述でこの説話は始まっている。」という最初の一行は、原文の冒頭「昔此宝州大鉄城。中五百羅刹女之所居也。」そのままである。

第二段落はその鉄城の説明。「鉄城と称ばれていたが、鉄の城ではなく赤錆色をした硬質の石で造られており、晴れた日は天日に赤く灼き、曇った日は同じ城だとは思われぬ程不機嫌に黒っぽく黙した。月明の夜は青色の中に微かに金粉を振り撒いたように見え、遠隔の地からも容易にこれを望むことが出来た。」原拠にこのような文なし。井上のイマージネーション。

第三段落「鉄城に吉事があれば動く「吉幢」と、凶事があれば動く「凶幢」とが立っていて吉凶を羅刹女に知らせた。船が漂着すると、羅刹女たちは「変

じて美女となり、香華を持し、音楽を奏して」「誘つて鉄城に入り、大いに歓待して情を結んだ。」「男を鉄牢中に繋ぎ、これを啖うのを常とした。」「は、原拠のまま。井上は、羅刹女が男を啖うのは「同棲しているうちに男の心に己れを疎する心の動くのを見ると」「男を鉄牢中に繋ぎ、これを啖う」としているが、原拠にそのような限定はない。「讎会已而置鉄牢中、漸取食之。」宴が終わるとすぐ牢に入れ、次々に食つていった、というのである。

以上は、この羅刹女國の風習の紹介で、全体のまえおきである。

第四段落―物語の始まり。僧伽羅の船が難破船となつて羅刹女國に漂着する。

第五段落―例によつて女たちは美女に変身し、香を捧げ音楽を奏で、男たちを誘惑する。

第六段落―最後に女王が残ると、男の方では僧伽羅一人が残つた。

この三つの段落は、細かなところには加筆があるが、基本的なところに、変更はない。

第七段落―五百組の夫婦の生活が始まつた。

第八段落―男たちにとつて、夢のような生活だつた。だが、帰國のため、男たちは船体の修理に着手した。

第九段落―船体の破損は甚だしく、僧伽羅は新しい船の建造に踏み切つた。

女たちはそんな男たちを優しくなぐさめた。

第十段落―それには訳があつた。羅刹女は人間に変身したまま千日を過ぎると、人間になりおせることが出来ると約束されていた。だが、それを実現したものは居なかつた。なぜなら、いったん羅刹の心が頭を擡げると、たちまち男を啖わずにはいられなかつたからである。

第十一段落―女たちが男たちを優しく遇したのは、男が他の女に氣を奪われた事を感じとつた瞬間に、自分が羅刹の心にもどつてしまうことを、よく知つていたからである。

第十二段落―男たちも女たちの氣配をよく感じとつていた。――

この第七段落から第十二段落までは、原拠には發見できない内容になっている。井上の創作ということになる。僧伽羅たちが船を手に入れようと努力すること、羅刹女たちが千日のあいだ人間でいられたら、そのまま人間になること

が出来ると、ということ、嫉妬の念が羅刹女を羅刹女たらしめる要件になっていること、逆に言えば、男の変わらぬ愛情こそが、羅刹女に救いをもたらす、といったことが、その中心になるだろう。第十段落の、「羅刹女たちは一名速疾鬼と言われる」云々は、国語辞典にも出てくることで、仏教的常識だが、たしかに原拠においても、羅刹女たちは虚空を飛翔している。

念のため、少し遡つたところから、原拠の文を見ておく。

時羅刹女望吉幢動。便齎香華鼓奏音樂。相携迎候誘入鉄城。商主于是對羅刹女王歡娛樂會。自余商侶各相配合。彌歷歲時皆生一子。

最後の「皆生一子」は、次の第十三段落のこととなるから、右の井上の創作にかかる六つの段落は、「自余商侶各相配合」と「彌歷歲時皆生一子」の間、もっと厳密に云えば、「彌歷歲時」とあるその時間の、その中味を、想像し、あるいは創造したもの、といつてもよいのである。

第十三段落―夫婦のあいだに、次々に子供が生まれた。不思議なことにみな女兒であつた。

第十四段落―僧伽羅にも女兒ができた。唇が紫色で、笑うことのない兒であつた。それは、他の兒も同様であつた。

第十五段落―全員が子供を儲けた頃から、僧伽羅の目に不思議な現象が映るようになった。昨日までいた部下が、今日になると家族ともども姿を消すということが、しばしば起こつたのである。南の方に賑やかな町があるので、そちらへ移つたのだろうと、僧伽羅の妻は言つた。

第十六段落―船が完成するのは、まだまだ日子が必要だつたし、安定した生活を得るためには、そういう判断もあり得るか、僧伽羅も思つた。

第十七段落―二年が過ぎた時、男の数は半数になつていた。村は寂しくなつた。その後も変わらず逃亡者は出た。

第十八段落―男たちが七十人ほどになつたある日、事件が起こつた。若い男がかねて思ひを寄せていた女を襲つた。男は誰にも氣付かれなかつたと思つた。

第十九段落―男が我が家の戸を開けた時、中から女の手が延びて男の手首をつかむと、月下の道を恐ろしい力で男を引きずつて鉄城の楼台の下まで来た。

第二十段落―男は女の口が耳まで裂けているのを見た。必死に逃げようと採

み合っている時、不意に一組の男女が現れた。女が男の足を掴んで引きずっていた。男の頭はごとごとと階段に不気味な音をたてた。

第二十一段落―男は夢中で逃げ、村の入り口まで来て失神した。

第二十二段落―かくて気のふれた男は僧伽羅にまといつき、鉄城の方へ僧伽羅をひっぱって行くが途中まで行くと立ち止まって、わけの分からぬことをわめき散らした。

第二十三段落―船がいよいよ出来上がった。大船なのに操るべき人間は少なくなっていた。祝いの酒宴の翌日、またかなりの人数が姿を消していた。

第二十四段落―その日、女たちの会議が開かれた。一人ずつ幼児を抱いた二十人程の女が集まった。

第二十五段落―女王は皆に諮った。まもなく千日になる。このまま人間になるか、羅刹女であることを続けるか。

第二十六段落―女たちは口を揃えて男と別れることは出来ないとやった。女王も同感であった。

第二十七段落―船出の日もきまり、食料の積み込みなどで村は活気を呈した。ただここに残さなければならぬ子供たちは哀れであった。

第二十八段落―出帆を二三日後にひかえて、僧伽羅は村の見回りをした。これ以上男手がなくなると、操船に支障をきたすおそれがあったから。

第二十九段落―不意にあの気のふれた男が現れ、鉄城の方を指さして喚いた。僧伽羅は、なにかただならぬものを感じて、鉄城へ行ってみようと思った。つねづね、連れ合いから、鉄城へは近付かないほうがよいと言われていたことも、気になった。

第三十段落―僧伽羅は階段を登って行った。すると、助けてくれという声がいくつも聞こえてきた。その中には、自分がよく知っている男の声もあった。

第三十三段落からのこの三十段落まで、先の粗筋に照らして、井上の創作部分であることが判るであろう。生まれた子が皆「唇が紫色で、決して笑うことのない」女兒であること。僧伽羅たちが船の建造を始めること、次第次第に男たちが数を減らして行くこと、精神に異常を来した男の存在とその見聞きした光景、女たちだけの相談とその結論、僧伽羅の見回り、等等。これは全て、井上

のイメージ・ションの産物である。

この辺り、原拠にはどう記されてあるか。

彌歴歳時皆生一子。諸羅刹女情疎故人。欲幽之鉄牢更伺商侶。時僧伽羅夜感惡夢知非吉祥。竊求歸路遇至鉄牢乃聞悲号之声。

時がたち、子供が生まれた。すると羅刹女たちがそろそろ夫たちを疎ましく感じ始め、鉄牢に入れることを考えるようになってきた。そんな時僧伽羅は悪夢を見、これはどうも宜しくない知らせのようだと考え、密かに帰路を捜すうちにたまたま鉄牢の側に行くと、そこから泣き声が聞こえてきた――。

大変、簡単な記述である。羅刹女たちは、男たちと一緒にいることに飽きてきて、それよりも啖いたいと思うようになってきたのだし、僧伽羅は夢見がよくないというので、どうやってここから出ようかと、探り始めたのである。井上の創作は、原話を大きく改変している。

六

続きは、どうであるか。

第三十一段落―声は言った。―女は羅刹女だ。毎晩仲間が三人ずつ啖われている。ここには六十人ほどいる。お前たちもいつかは啖われてしまうぞ――。

第三十二段落―どうすれば良い？ 僧伽羅は尋ねた。朝、日の出を拝むと救いがあると聞いている。声はそう言った。

第三十三段落―僧伽羅はすぐ家へ戻り、妻なる女にお前は羅刹女か？ と訊く。女は肯定し、後二日どうか他の女に気持ちに移したり、浮気をしたりしないでほしいと頼む。

第三十四段落―僧伽羅は女の心にうたれたが、牢にいた六十人の男たちを見殺しにできないと思う。船のためにも必要な人間だ。

第三十五段落―その夜、僧伽羅は妻を愛撫した。哀れであった。しかし、夜が明けた時、彼は海辺へ出て、日の出に向かって祈った。

第三十六段落―男たちが鉄牢から走り出てきた。僧伽羅はすぐ出帆することにした。

第三十七段落―家へもどってみると、女も子供も姿を消していた。

第三十八段落―船が海上に浮かんだとき、どこからともなく楽の音が流れてきた。三年前、漂着したときに、聞いたのと同じであった。皆聞きほれた。すると突然、渚に女たちが子供を抱いて現れた。男たちは、自分の女自分の子供を、必死に捜した。

第三十九段落―僧伽羅は声を噓らして引き止めたが、男たちは糸に操られるように、女たちのところへ引き寄せられて行つた。僧伽羅に会釈するその顔には、啖われるかもしれないが仕方がないという、諦めの表情があつた。

第四十段落―そんな騒ぎの中、船は次第に岸を離れた。僧伽羅の耳は、妻だつた女の「四辺をつんざくような悲痛な叫び声」を聞いた。信じられぬほどの強い力で、身も心もそちらへ引かれて行きそうになったが、僧伽羅は、口には神呪を唱え、目は渚の方を見ぬように、必死に耐えていた。

ここで「羅刹女國」は△完△となる。

この部分に当たる原拠の文を引用してみる。

竊求歸路遇至鉄牢乃聞悲号之声。遂昇高樹。問曰。誰相拘繫而此怨傷。曰爾不知耶。城中諸女並是羅刹。昔誘我曹入城娛樂。君既將至幽牢。我曹漸充所食。今已大半。君等不久亦遭此禍。僧伽羅曰。当圖何計可免危難對曰。我聞海浜有一天馬至誠祈請必相濟度。僧伽羅聞已竊告商侶。共望海浜專精求救。是時天馬來告人曰。爾輩各執我毛鬣不回顧者。我濟汝曹越海免難。至瞻部洲吉達鄉國。諸商人奉指告。專一無式執其髦鬣。天馬乃騰驤雲路越濟海岸。

天馬のたてがみに纏まって、皆が逃げ出したところである。一番大きな違いは、このように、原拠では、天馬が現れて救い出すということになっている点である。必死に祈ることよって、奇跡が起こるという、説話の常の型であるとともに、そのイメージの壮大さを驚くところでもある。しかし、井上は上に見たように、船で逃げ出すことに変更した。原話の奇談性・奇瑞性を弱めて、人間の話に質的変更を策したのである。

原拠の続きを見よう。

諸羅刹女忽覺夫逃。遞相告語。異其所去。各携稚子凌虛住來。知諸商人將

出海浜。遂相召命飛行遠訪。嘗未踰時遇諸商侶。悲喜俱至涕淚交流。各掩泣而言曰。我惟感遇幸會良人。室家有慶恩愛已久。而今遠棄妻子孤遺。悠悠此心誰其能忍。幸願留顧相與還城。商人之心未肯回慮。諸羅刹女策說無功。遂縱妖媚備行矯惑。商侶愛恋情難堪忍。心疑去留身皆退墮。羅刹諸女更相拜賀。與彼商人携持而去。僧伽羅者。智惠深固心無滯累。得越大海免斯危難。

原拠の話では、逃げてこられたのは、僧伽羅ただ一人であつたが、井上は、約半数の人間が、羅刹女の誘惑に耐えて、帰国の途についたというように、改変している。

また、原拠の『大唐西域記』の記述は、ここまでで全てではない。上に記したように、真の建國説話は、この後に展開するのである。つまり、僧伽羅を引き止めることが出来なかった羅刹女の女王が、僧伽羅に先回りしてやってきて、僧伽羅の父をだまし、国王をだまして啖う、そこで僧伽羅が戦船を従えて羅刹女の島を襲つて全滅させ、そこに新しい国を建てて、僧伽羅国とした、というストーリーである。井上は、ばつさりとの後半部分を切り落とした。そうすることによって、「羅刹女國」は、その命名どおり、羅刹女たちが棲む不思議な国の物語として、仕立てられた。換言すれば、南海のどこかに、今なお、羅刹女たちの島は在り、嵐に巻き込まれた船が漂着すると、妙なる楽の音や香につつまれて、五百人の美女たちが現れ、疲れきった男を魅惑している―はずである。

七

井上が施した最大の変更は、この、原拠の後半を採用しなかったということである。原拠の最後の一句は「僧伽羅者、則釈迦如来本生之事也。」である。つまり、僧伽羅とは、釈迦の前身であるがゆえに、かく、妖怪たちを滅することが出来たのであつた、ということであつて、ここにこの話が仏説である所以があるのであるが、井上は必ずしもこの仏説に動かされたのではなかった。それよりも、羅刹女という存在、ことにも、五百人もの羅刹女が羅刹女だけで島

に住む、という不思議に、興味を覚えたと言ってよいだろう。

そういうえば、われわれも、思い出すものがある。西鶴『好色一代男』。その後、一代男が船出して行く「女護の嶋」もまた、女ばかりの島のようなのである。そして一代男は、いまもって帰って来ない(注)。

また、「羅刹女国」は、叙事詩『オデッセイ』の、魔女キルケーの島におけるオデッセーの冒険にも似る。また、最後の、羅刹女王の「悲痛な叫声」に僧伽羅が「身も心もその方へ以て行かれそうにな」る、という設定は、オデッセイがあのサイレンの呼び声に身を揉み振った悲痛を、僧伽羅にも味わせたものにはかならない。

「羅刹女国」は、これら先蹤を含みつつ存在すると思われるのだが、仏説から身を切り離すことで、井上は、羅刹女たちの羅刹女一性一その存在性を、より鮮明に描き出した。あらためてそれを列挙してみると、

- (1) 人間の男がやってくると、人間の女の姿になって誘惑する。(原拠にあり)
- (2) 男が自分を疎ましく感じ始めたり、他の女に気を移したりすると、たちまち啖う。(井上の設定)
- (3) いったん人間の姿となって千日そのままで過ぐすと、羅刹女に戻れなくなる。(井上)
- (4) 天空飛行の能力を持つ。(原拠)
- (5) 生まれる子供はみな女兒。(原拠に明示はされていないが、理からはそうなる。)
- (6) 子供はみな、唇が紫色、笑うことを知らない。(井上)

この中で注目し値するのは、(2)である。原典たる『大唐西域記』では逆である。羅刹女たちは、いったん子供が生まれると、男を疎ましく感じ始め、隙をうかがって男たちを鉄牢へ閉じ込め、次々に啖うのである。井上はそれを逆転して、男の移り気が引きがねになるとするのである。別言すれば、知らずして男は、キャスティングボードを握っていることになる。そして、それがあるがゆえに、(3)の条件が生じてくるのである。千日の間、男が貞節を守るかぎり、羅刹女はその本性には戻ることが出来ない、ということである。羅刹女が羅刹女と

しての生活を繰り返すか、それとも人間として生きぬくかは、男の誠意の継続か、または男のこころを他に移させない間断ない愛の傾注による、ということになる。要するに、愛の永続。もしくは、不変の愛。

しかし、それが画餅に帰するものであることは、ほとんど誤りない。男は逃げ、女は啖う。男は常に、船出をしつづけるのが運命であり、女は、愛を傾けた対象を啖いつくすという軌から逃れられない。そのような、人間の永遠の繰り返しを、世の「説話」は、乾燥した悲哀感の下、飽かずに語る。それは、時空を越えて共通の主題である。

「僧伽羅国縁起」も同様だ。ここにあるのは、人と強き獣との結婚と常ならぬ出生、父親殺し、そして、流され王の主題である。

獣との結婚といえは、ここでもわれわれは、『南総里見八犬伝』を思い出す。『南総里見八犬伝』も、一国の存否をめぐる物語であった。また、ローマの例を持ち出すまでもなく、その建国に強力な獣の力があつたと語られる例は多い。建国説話の一パターンである。

そして、人と獣の間に生まれた子供が、その父なる獣を殺すという設定。つまり、父たる獣は、自分の許から立ち去った妻子を忘れ兼ねて人里近くを徘徊し、そうとは知らぬ息子は、人々の悲苦を解消せんがために獣を斃そうとする。その時、刃を握って近づく息子を認めた父獣が示す、「何とも言えない慈愛に満ちた眼眸」、腹に刃を突き立てられながら、「なお怒りを忘れている風で、優しく若者を見守り続け」る、という態度に、「父親殺し」という主題が潜在させている意味の一つが明らかになる。

息子の行為は、いわば、救国の行為であった。しかし、その裏面の父親殺しという行為は、組織一国の側からも息子自身の側からも、罰せられねばならず、贖われなければならない。放逐一流罪。神が嘉すれば生き、嘉せざれば死す。息子は、とある島に漂着、やがてそこに一国を建てる。母を通して王族の血をひいていた彼は、かくてふたたび王の地位を回復する。

八

しかし、「僧伽羅國縁起」で、ことにも忘れることのできないのは、今も引用した、自分を斃さんと近付く息子を、優しく見守る父獸の姿である。そして、「羅刹女國」においては、最後の羅刹女王の叫びと必死にその姿を見まいと耐え続ける僧伽羅のころである。かかる悲哀の感情は、井上の文学の核である。大著『大唐西域記』の中から、ことに、玄奘三蔵がそこを通過したわけでもない、枝街道にあたるこの僧伽羅國についての記述に井上が注目したのは、この一話に、愛別離苦という、説話をおおう普遍的な主題を托すに足る／＼位置のエネルギーの潜むことを、感じとったからであろう。

注 横山重校訂『好色一代男』（岩波文庫一九九三・一二・一五 第四〇刷）の「女護の嶋」の注には、左のようにある。

多クノ古板日本図ニハ本州ノ南方ニ当リ「羅刹国」ト云フ大島アリ。
ソノ註ニ「此国女ハカリ住国也男ユキヌレハ二度トカヘラスト云」トアリ。